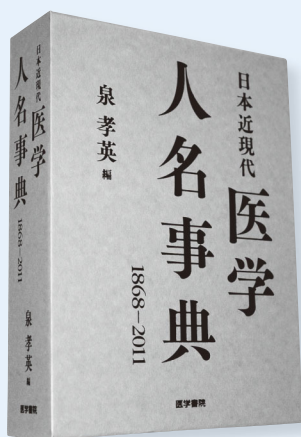


泉孝英＝編
『日本近現代
医学人名事典
【1868-2011】』

2012年12月発行
定価12,600円(税込)
[ISBN978-4-260-00589-0]医学書院



「歴史もの」がプレゼンスを示した2012年、味わい深い事典が刊行

2012年の日本の医学界を振り返ると、山中伸弥教授のノーベル賞受賞という最先端の研究と並んで、「歴史もの」が確かなプレゼンスを示すようになった1年であった。「医学史」の研究はもちろん以前からおこなわれており、優れた書物も出版されていたが、過去からの蓄積と新刊された書物が相まって、ある〈まとまり〉のようなものを示すようになった。医学と医療の現在性、未来志向性と並んで、それが持つ長い歴史が確かな存在感を持つようになったのである。

医学書院から昨年発行された書籍をみても、金川英雄が翻訳し解説を付した呉秀三・樫田五郎『精神病者私宅監置の実況』はベストセラー並みの扱いであるが、これは今から100年ほど前に発行された論文を現代の医療関係者にも無理なく読めるように現代語訳したものである。木村哲也『駐在保健婦の時代 1942-1997』は、激動の戦中から戦後・高度成長期に形成された日本人の健康と日常を、高知県の保健婦の現代史を通じて生き生きと復活させた著作である。翻訳ものでは、ウィリアム・バイナムとヘレン・バイナムの『Medicine 医学を変えた70の発見』は、私も共訳者の1人であるが、医学史の専門家だけでなく多くの人々に訴えるインパクトがある図版を300点以上も掲載したヴィジュアル医学史の決定版である。

これらの2012年の成果は、近年の多彩で多様な医学史の書物と融合して、「医学史」というものを、緩やかだが確かな形で存在感をもつ主題として作り上げてきた。たとえば、2008年に医師の茨木保が執筆して医学書院から発行された『まんが 医学の歴史』、2010年に藤原書店から刊行された主にフランスの歴史学者たちによる豪華な『身体の歴史』全3巻、

2012年に歴史学者の青木歳幸が吉川弘文館から刊行した『江戸時代の医学——名医たちの300年』などが、記憶に新しい。これらの仕事に、『看護教育』に連載されている茨木保「ナイチンゲール伝」や、大河ドラマの主人公の山本八重が日清・日露戦争に篤志看護婦として参加する姿も加えることができるだろう。

『日本近現代医学人名事典』は、このような医学史という領域に、伝記的な基礎を与える重要な仕事である。明治元年(1868)から平成23年(2011)までの140年あまりの期間に、医学・医療に携わった人物で、すでに物故された3,762人の記録である。日本の医者が中心であるが、日本やその植民地などで活躍した外国人の医療者や、看護師、薬剤師、医療の社会運動家、医療問題で活躍した患者など、医療という領域を作り上げている多様な領域から選ばれている。それぞれの人物の項目は、国内の医学校や留学などの教育や、大学や病院や教会などの役職の記述を中心にしたものになっており、業績の解説や著作と評伝などの文献的な情報が付け加えられている。医学関連の政治・行政や医学評論だけでなく、医師であると同時に歌人や文学者などとして活躍した個人も採用されている。親戚や婚姻関係などの記述も味わい深い。巻末につけられた「年表」は、明治から平成をカバーする優れた医学年表になっており、自分が生まれた年に何が起きたのかをまず見てみると楽しい。

この書物が多くの医療関係者の本棚に置かれて、医学の歴史が多くの人々に実感されることが望まれる。そうすれば、現在において実用的であり、未来には改善される医療というだけでなく、長い伝統を持つ豊かな営みという〈新しい〉顔を見せることだろう。